

---

# 稻妻戦隊ライレンジャー

咲季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

稻妻戦隊ライレンジャー

### 【Zコード】

Z4263A

### 【作者名】

咲季

### 【あらすじ】

高校の極道光の恋物語です。設定は書きながら考えてますのでどうなることやら。（汗

## プロローグ（前書き）

初めての作品で設定やらなにも決めていないのですが上手く話しがまとまれば良いですね。

## プロローグ

俺は自分の名前が大嫌いだ。

ヤクザ映画にでてきそうな苗字に、親が光り続けるようことつけたこの名。

苗字の方はまあ仕方がないだろう。先祖代々受け継がれてきたものに文句を言うのも失礼だ。

問題は「光」という名だ。俺は自分の名に小さなコンプレックスを抱いている。

中学校まではどうってことなかった。まだ自分の将来に不安などなかつたし、ただ毎日夕方遅くまで遊んでいればよかつたのだ。しかしそんな毎日も中学まで……いや、高2になつた今だからそう言つんだろう。

本当は年を重ねる「」とに感じていたんだ。

自分の名前と自分との格差を…

## 出会い

「極導光」

朝テストに書いた自分の名前を見て、俺は少し居心地の悪さを感じる。

（…こかひかつ…）

やには違和感を感じる

この教室で自分の名前に違和感を感じているのは俺くらいのものだろう。

ケレスマークが必死に朝テラストにしゃぶしゃんでしまった。俺たちは上の空であった。

声がかかる。

別にテストが嫌いなわけじゃない。勉強はそこそこできる。ケンカも得意だ。運動神経は良い方だけど運動系の部活に入るつもりもない。だつてしんどいし……。

「お前はやればできる」と何度も教師から言われたことか……。

で一度も出したことがない（苦笑）

「 ものの外 」 を出でせる何かが俺には無い。 そつ。 皆無なんだ――――

『文選』卷之三

静寂を斬る様に安藤の声が教室中に響いた。

名前しか書いてない。

お前名前しか書いてねえしやん

ପାତାଲାମାର୍ଗ

怪訝そうに繭を上につり上げる。大半の奴は大体ビビッて黙るのだが（俺の柄の悪さも加算されてなのか）桂にはまるつきり通用しない。

「怒んなよー。何？分かんなかったの？いや、お前頭いいかんな。女のことでも考えてたんだろ？」

それどころか調子こいて更に話し掛けてくる。

「別に」

「あつそ」

俺のノリの悪さに見切りをつけた様に桂は他の奴に話し掛けに言った。

「女ねえー」

ため息とともに独り言をもらしてしまった。

高2となれば彼女の一人は居て、文化祭などに心を躍らせるものなのだろうか。

あいにく俺の初恋はまだであり、彼女も居ない。親友とやらも居ない。

こう思つと何となく寂しい。

（俺は死ぬまでこんな人生なのだろうか）

絶望にも似た想いを抱いているとき回収したテストを数え終えた安藤が口を開いた。

「今日は転校生を紹介するだー。園田ー入つてこーい」

（転校生？？そういえば昨日言つてたな。まあ俺には関係無いなー）

その転校生を見るまで俺はそう思つていた。

ガラツ…

戸を開ける音と共に教室に入ってきた女の子に俺は……心を奪われるとはこういう事をいうのだろうか…今までに感じたことのないモノを感じた。

彼女の名前は園田ユリ。

俺の心に稻妻は落ちたのであった。

白い肌に赤い頬が映える。黒い瞳には確かに光が宿っている。はつきりと瞳を見たことはないけれど。

あの日俺でつかい雷をお見舞いした少女、園田ユミ。  
俺の遠く前方に座る、彼女の瞳には何が映っているんだろうな。  
…なんてストーカーじみたことを思つ。今日この頃。

園田がきて一週間。

あの日から俺のあたまんなかは園田の事でいっぱいですよ。  
そこは否定しない。初めての感情に戸惑つてはいるけど。  
だけど今俺が進んでサッカーボールを追つているのは決して  
園田の気を引きたいとかそんなんじゃあ…ない。

うん。たまには一生懸命体育の授業も受けるのもいいかなーと思つ  
ただけで。

おんなじグラウンドにいる園田を浴びたいとかそんな下心だけで動かないよ。

あの日から…といつも俺は園田と一度も言葉を交わしていない。  
テニスラケットを握る園田が見える。周りの女子と楽しそうに談笑  
していた。

(クラスの奴とも馴染めたんだな…。)

「光いいいいいい…！」

野太い声が俺の名を呼ぶのでハッと我にかえつた。

「てめえこらあ…！！！珍しくやる気だしたと思つたら、いつまで  
ボウつとしてるつもりだああ…！」

必要以上に大きな声で俺を呼ぶのはサッカー部の太田だ。

ふと向こうを見るとボールが転がっていた。

「ああ…取ればいいのね？」

気の抜けた質問をすると太田のダルマの様な顔がさらにダルマらしくなった。

「今同点なんだぞお！？チャンスは生かすんだろうがあああ！！？？」

俺はコイツが好きじゃない。そもそも熱血タイプは苦手だ。  
(たかがクラス対抗のサッカーゲームだろうがー。)

そんな事を思いながらボールを追う。

案外早く転がるボール。後少しど思いながら追い上げるも先へ先へと行ってしまう。

1メートルほどの間隔をうまく保つて転がるボール。

俺はヤツキになっていた。何だかボールに踊らされてる様な気がして。

コシンッ・・・

気がつくと、ボールは止まっていた。いや止められていた。

園田ユミによつて。俺は驚いた。何故男子の方に園田が居るのかが理解できなかつたんだ。

でもすぐに理解した。

ボールが女子の方に転がつてきたんだつた。あんなに大きく聞こえていた太田の声が犬の遠吠えの様に聞こえていた。

足元に転がつてきたボールを園田が拾つた。

俺の心臓は大変な騒ぎだつた。ボールを追いかけていたせいか心拍数が異常だ。

園田の腕が俺の方に伸びてきた。そしてボールを俺の顔に近づけて一言いつたんだ。

俺は園田の声をよく知らない。

俺は園田の事を全く知らない。

ただ端麗に整った顔だけを知っている。

中身なんか知らない。

もしもこの気持ちが恋なのであれば、俺は園田の顔に恋をしていたんだ。

だからギャップに驚くことはない。顔と性格が全く一致するなんて事ありえないんだから。

「何? ジロジロ見ないでくれる?」

「あー! ゴメン!」

…とつさに謝ってしまった。俺にボールを渡すと園田は何もなかつたように笑顔で女子のもとに帰つていった。さつきの声が嘘の様に。さつきの顔が嘘の様に。明るく、魅力的な表情で。

何だかショックだった。

何でだろ? 俺嫌われてる??

そんな事ばかり考えているうちに、チャイムが鳴った。

家にかえり、汗ばんだ体操服を袋から出すとツンとした臭いがした。

書しか一には繋しよく放り投げた  
「冗ちやん美恋でもしたのかよ?」

そういうたのは俺の弟・一樹だ。

小2だと囁ひのに何とも憎りしこ顔で聞いてきた。

なににと

悪気が有るのか無いのかさつぱり分からぬ顔だ。

## 小学生の心理はよく分からぬ。

そう思つているとTVから『ダッターッ！』という威勢のいい効果音が聞こえてきた。

その音に吸い寄せられるよつこ一樹は一ノ木に飛んでつた。

中のだ。

この30分の間だけは彼の表情は夢見る少年そのものだ。

さすがに7時JNの夕食タイムに向けて米をといて、冷凍のパン

今日は両親とも仕事だから仕方ない。

米をといでいるとき、ふと園田の顔を思い浮かべていた。

一瞬聴いた声も驚くほど鮮明に思い出す

だからあの言葉にそれほどまで酷いショ

ただ、あの冷たい口調は俺に対してだけ使われているようだった。

男子と喋つてゐるところはあまり見ていないけど、なるべく普通に

話している。

俺は嫌われているのかもしれない。

俺は園田のことをあまりよく知らない。

顔が好きだ。

こんな不純な理由で人を好きになるべきでないのかも知れないな。

『ドッパアーナン!!』

TVからもれだす効果音が俺の意識を白い汁に浸れてくる米に戾させた。

「一樹一。うるせえぞー」

TVに釘付けの弟の意識はヒーローを追いついてるようだ。ただ小さな背中が左右に揺れている。

「つたく…」

今いじり何をしてくるんだろう…。

食器を並べているとき、ハンバーグを焼いている時、何故想つてしまつのはそういう事なのだろう。

「兄ちゃん!!!!!!」

大きな声で俺の事を呼ぶ弟の田が…輝いていた。

こんな田をするときは決まってお願い事をするときだ。

「ん?もう7時か。」飯にしないとな

はぐらかす様に言つのだが…全く通用しない。

「兄ちゃん。お願いがあるんだけど…」

ほら来た。

「稻妻戦隊ライレンジャーの映画みたいの」

「映画??」

映画のお願いとは思つていなかつた俺は少し驚いた。

また新しいお菓子を買つてくれとかそういう事だと思つていたんだ。

「稻妻戦隊つてこつたらさつきやつてたTVのか？」

「うん…………！」

力いっぱい返事した一樹の目がキラリッと輝いた。

ぐはっ、純粋パワー。

この田で見られる時大半は頼みを断れない。

今回もその大半に入ってしまった…

高校生男子が弟と口曜日に戦隊ものの映画を見に行くつても寂しいよな…。

でも俺に頼むつてことは両親が仕事で忙しいこと分かってんだろ？

少し弟がかわいそうになつた。

俺が出来る範囲のことはしてやるべきなのかもな。

そういうしてこなつちに今日も終わる。

明日俺は何してるんだろう。

もう一回くらい話したいなあ。

金曜日… 今日でやっと長かった一週間が終わる。  
家に居るからといって然して関係ないのだが。

キーンゴーンカーンゴーン・・・・

俺の望んでいたチャイムの音が学校中に鳴り響いた。

よし！ 家に帰るうとバッグを持った瞬間、安藤に声をかけられた。

「極導、お前今日直だろ？？」

「へ？ そうだけど？」

唐突な安藤の言葉に少し戸惑つた。そして嫌な予感がした。  
「今日は放課後掃除の日だから図書室に掃除にいってくれ。」

・・・・・・・・なんで俺だけが・・・・・・・・

何て言える立場ではない！ それは俺が一番よく知ってる。

だって今日何もしてなかつたから。おんなじ日直の優等生・五島に  
ゼーんぶおしつけたから。

安藤のやつ、ちゃんと見てやがつたのか…。

雨のせいで廊下がすべる。図書室は校舎の外れにあるからなお更だ。  
雨で湿つた空気が灰を湿らす。

図書室に入ると湿気でもんわりとした空間があつた。

驚くほど静かだ。俺しかいない。

サボリたい衝動にかられたが、やることもないのでまじめに掃除をする事にした。

しかしホウキが見当たらない。

その前に、掃除のロッカーが見付からない。

この高校の図書室は結構大きくて有名で、一度も入ったことのない

俺がいきなり掃除をしようつとこつのも無理な話なのだ。

「あーー ホウキどこだよーー」

「ゴトソッ

俺がホウキを捜し歩いていると、隣の本棚の向こう側からにぶい音がした。

「…誰かいるのか？」

俺の声は静かに響いた。寒氣を覚えた。だつて此処には俺以外いなはずだから。

「誰だ！！！！！」

自分の弱みを見せないように大きな声で叫んだ。  
そして本棚の向こう側にいる影をつかんだ！

「…・・・・のだが。

「これ… ホウキ…」

そういうて一本のホウキを俺に渡したのは、園田ゴミ。その人だつた。

目が点になつてゐる俺を不思議そつに見る園田。  
何かいわなければ！

「あ… ありがとう…！」

力いっぱい言つた言葉がこれ。格好悪。いくつだよ…

「うん」

クスッつと笑つて、彼女は言つた。

昨日とは別人のよう、フンワリとした雰囲気だった。

どちらが本当の彼女なんだら？

「園田、なんで居んの？」

率直な疑問をぶつけてみる事にした。

「いや…別に」

ハツとした様に園田の表情が少し固くなつた事に気づいた。  
どうしたんだろ？

チャンラーン ダダーナン

そう思つた瞬間に園田の携帯がなつた。  
俺から目を逸らす様に園田はいそそと図書室を出て行つた。  
園田の態度の変化に違和感を感じた。  
少し、何かに怯える様な目をしていたのだ。

彼女の足音が聞こえなくなると雨の音だけが寂しく鳴つていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4263a/>

---

稻妻戦隊ライレンジャー

2011年1月13日02時33分発行